

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16898

研究課題名(和文)環境意識からみる現代イランの社会変動

研究課題名(英文)An Anthropological Exploration into Emerging Environmental Discourses and Practices in Iran

研究代表者

阿部 哲 (ABE, Satoshi)

長崎大学・多文化社会学部・戦略職員

研究者番号：90732660

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：イランでは、1990年代以降、政府の産業優先政策や低質ガソリン消費などを起因とする環境問題が深刻化している。そのため、近年は環境問題の観点から都市計画をはじめとする種々の政策の見直しが進められ、このことは人々の環境意識や生活へ影響を与えている。本研究では、近年イランで現出し始めた環境言説およびその実践について調査し、現代イランの社会変容に関する分析を行った。これらの環境言説・実践は、イランの文化歴史的な文脈を反映させながら、多様な言説ととりわけ、西洋近代科学に準じた環境観、ナショナルスティックな情操を喚起する環境観、イスラーム教理に基づいた環境概念が併存関係にあることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Along with its rapid economic growth in the 1990s, Iran began to experience serious environmental problems, such as air pollution and water shortage. Consequently, both governmental and non-governmental institutions have embarked on numerous environmental projects that involve a variety of individuals from environmental experts, government officials, researchers, students, to non-expert citizens, among others. This study looks at emerging discourses and practices of the environment in Iran and examines socio-cultural implications of environmental problems that now crucially shape the course of Iranian society. My findings suggest that seemingly disparate discourses of the environment in the country --- in particular, those of modern science, nationalism, and Islam --- are indeed deemed compatible and are developing in ways that reflect the contingent historical contexts of contemporary Iran.

研究分野：文化人類学

キーワード：環境問題 西洋近代科学 イスラーム ナショナリズム イラン

1. 研究開始当初の背景

イラン政府により公表されている国家五カ年計画から、1990年代以降、同政府は環境問題に対する政策強化を図ってきたことが読み取れる。とりわけ、ハタミ第一次政権下(1997-2001)において、非政府組織(NGO)も環境問題の解決へ積極的に乗り出して、草の根レベルで市民に向けられた啓発運動が活発化した。これらのことは、イランにおける環境問題の深刻化を示すとともに、それらの問題に対して多方面からの解決が試みられたことを暗示している。これらの環境政策の特徴の一つは、「持続開発(sustainable development)プロジェクト」などに見られる、環境を科学的手法により分析し、その原因を特定する環境科学に根ざしていることであった。この特徴については、史学的見地から、イランの環境政策史において、どのような技法がどの分野において適用され、発達してきたのかについて研究が進められている。また、草の根環境啓発運動を、イランにおける新しいタイプの社会運動として分類し、同国における市民社会の形成メカニズムの一部として分析する研究も行われている。

しかし、これらの議論では、環境問題が政治社会的側面を中心に論じられることが多く、イラン国民が彼らの生活空間で、環境問題をいかに捉え、いかなる意識のもとに環境活動を行っているかを問うた先行研究は希少である。こうした中で、研究代表者は上述した政治社会的側面を考慮に入れながら、それらの分析枠組みでは捉えきれない、環境問題の文脈を通じて独自に現出しているイランの文化的多面性について調査を開始し、とりわけテヘラン市民の環境意識とその言説の多様性について明らかにすることを本研究で試みることにした。

2. 研究の目的

イランの政府諸機関による環境問題に対する主なアプローチとして、上述の環境科学が挙げられる。その一方で、破壊されゆく「自然」を危機に瀕した自国の象徴と捉えて独自の環境活動を展開する NGO も存在する。すなわち、広範にイラン社会へ変容をもたらしている環境問題は、それらの問題の解決の過程で、近年様々なアクターを巻き込みながら、現地の脈絡に則して多様な環境言説を産出している。しかしながら、これらの環境保護活動の様子やその文化社会的影響については、十分な現地調査に基づいて導き出されているとは言い難い。

本研究の目的は、環境問題が深刻化し、変容の最中にある現代イラン社会を、同国で産出し始めた環境言説と市民の環境意識を通して分析し、これらを産み出している独自の歴史文化的背景について明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、現代イランにおける、環境活動従事者の取り組みと共に産出、伝搬している「環境」に関する言説と環境意識について明らかにするにあたり、現地調査と文献資料調査を行う。詳細は以下の通りである。

(1) 現地調査

環境庁関係者(環境エキスパート)や環境 NGO、当該問題に精通する新聞記者など、環境問題に直接的あるいは間接的に携わる個人、団体へ半構造的聞き取り調査を行う。具体的には、彼らの 2011 年(欧米主導による経済制裁の強化後)以降のイランにおける環境問題についての傾向および彼らのそれらに関する見解、他の関連機関との協力体制、また一連の環境啓発活動に対する国民の意識などについてインタビュー調査を行う。その際、彼らの「環境」概念や環境問題に対する理解のあり方、解決アプローチに着目する。

また、テヘラン市民(非専門家)にも、彼らの環境観、環境意識の変化、環境保全のための意識的な取り組みなどについて半構造的聞き取り調査を行う。

環境啓発と係わりのあるイベント(国際環境展、植樹イベント、環境会議など)へ出席して、イベント参加者の間で交わされている言説や環境問題をめぐる議論に留意しながら、参与観察を行う。可能である場合には、イベント参加者へも同様のインタビュー調査を実施する。

(2) 文献資料調査

現地の刊行物(新聞、雑誌、オンライン・ニュースなど)を中心に文献資料調査を行う。具体的には、メディア媒体で取り上げられている環境問題の事例、頻度やそれらの掲載のされ方、そして、議論の特徴についての情報を収集する。また、テヘラン大学の書店群を中心に、環境関連分野の文献について調査を行う。

4. 研究成果

メディア媒体の調査から、現在のイラン社会が直面する環境問題の傾向が明らかになった。大気汚染問題が、依然として深刻な社会問題としてメディアで度々取り上げられ、自動車・オートバイによる過度の排気ガス排出や(国産の)低質ガソリンの消費がその原因として言及されていた。また、イラクやサウジアラビアなどの周辺諸国を起源として発生しているとされる砂塵による健康被害の影響についても頻繁に言及さ

れている。これらに加えて、イラン国内で普遍的に生じている水不足問題がメディア上で度々論及されている。特に、異常気象やダムのみスマネジメントによる水資源（湖、川など）の枯渇が市民の抗議運動へと発展した事例が、折に触れて、報道されており、環境問題の政治的側面が色濃く反映されていることがわかった。以上の文献資料調査から、イランでは、1990年代以降、政府機関を中心に様々な機関・団体が大気汚染や水質汚染の解決へ取り組んできているが、その成果は不十分で、これらの問題は依然として国家重要課題であることが明らかとなった。

このような状況を鑑みながら、政府関連機関が環境政策を通じて発信している概念枠組みについて、政府関係者（環境庁職員）への聞き取り調査および文献資料調査を行った。具体的には、環境庁は、「持続開発アプローチ」を軸にした、エネルギー、農業、水、石油、ガスなど広範な分野における事業についての査定、企画および執行を行う役割を担っている。その際には、環境を科学的な対象として分析を行い管理する、環境科学による手法を適用・推進していることが明らかになった。こうした科学的概念枠組みに基づいた環境プロジェクトの成果は、年次イベントである「国際環境展」（於テヘラン市）において公的に披露されている。また、環境庁は、この環境展や他の環境プロジェクトに国外の企業への誘致も積極的に行っており、イランの環境問題への取り組みにおける国際的な次元が明らかになった。

政府によるこれらの取り組みを念頭におきながら、テヘラン市民を対象に環境意識調査を行った。環境エキスパート、新聞記者および（非専門家の）テヘラン市民へのインタビュー調査とメディア媒体調査より、前回調査時（2011年）と比較して、回答者の間で環境問題に対する意識が高まっていることが明らかになった。インタビュー調査で繰り返し指摘された点として、大気汚染が原因とされる呼吸困難や視界不良などの環境問題は、より直接的に市民の生活へ影響を与えるため彼ら自身の環境意識の向上へとつながっている、ということであった。このような環境意識の高まりは、先述したメディア媒体にも反映されている。例えば、政府系ニュース・ラジオ番組では、テヘラン市内における大気汚染レベルの周知が定期的に行われている。また、新聞紙上やウェブ・ページ上においては、情報源としての「環境」セクションの増設が目立ち、これらの媒体を通して環境問題に関する情報が市民へ継続的に発信されている。また、テヘラン市内の交通要所、特に排気ガスの排出が著しい地域において、マスクを着用する市民の姿が前回調査時よりも大きく増加していることが確認でき、テヘラ

ン市民を取り巻く環境問題に対する意識の変化が見られた。多くの回答者は、公園造設や植樹活動などをはじめとする、持続開発プロジェクトに関する知識を有し、その解決方法を支持するという点において、彼らの間で科学的な環境観が拡充していることも確認できた。

さらに、環境エキスパート、環境 NGO および市民へ半構造的聞き取り調査を実施した。先述の科学的な環境言説に加えて、インフォーマントが環境問題について語る際に、それらの問題が重層的に理解されていることが明らかになった。彼らの環境意識の特徴として、ナショナリスティックな情操を介して環境問題を捉える点があげられる。すなわち、周辺諸国からもたらされているとされる砂塵は、身体へ害を及ぼすのみならず、イランの国家主権を脅かす問題でもある、との独自の認識が明白となった。同様の観点から、多くのインフォーマントは、イランを多種多様な自然資源を有するユニークな独立国家であると位置づけていた。この視座によれば、イランが有するこれらの自然資源の物理的な損壊は、象徴的に国家の弱体化を意味し、このような環境意識のもとで、彼らは環境活動へ従事していることが聞き取り調査および参与観察より明らかとなった。この視座に根ざした環境実践の一例としてエコツーリズムが挙げられる。テヘラン市内の多くのエコツアー会社は、イラン国内のみに存在するとされる自然資源を保護する地域への訪問や同国内にのみ生存が確認されている希少動物の観察をツアー企画に組み込んでいる。これらを通じて、インフォーマントが、ナショナリスティックな情操を介しながら、独自に環境意識を醸成する過程を検知することができた。以上のフィールド調査から、とりわけテヘラン市民間で環境意識が高まる中で、科学的概念枠組みが政府関連機関によって促進される一方で、ナショナリスティックな情感に基づいた環境言説も現出していることが明らかとなった。

2016年3月に、イラン環境庁の主催による、環境エキスパートとイマーム・ジョメ（金曜礼拝指導者）とからなる環境会議へ参加する機会を得て、イランにおける環境問題とイスラームの関係性についての示唆を得ることができた。イマーム・ジョメが環境問題について語る際には、クルアーンあるいはハディース（預言者モハンマドおよびシーア派十二イマームの言行録）を引用し、道徳的側面からその解決策を模索していることが明らかになった。また、環境庁がイマーム・ジョメに期待する効果として、彼らのモスク等での説法において、イスラーム的観点から環境保全の大切さを説き、聴衆の自発的な環境意識を促すことがとりわけ強調されていた。

環境庁は科学的環境プロジェクトを積極

的に推進する一方で、近年はイスラーム法学者とも連携を深めながら、イスラームの視座からも環境問題への取り組みを開始していることが、フィールド調査とメディア媒体調査より明らかとなった。イラン最高指導者によるイスラームと環境問題に関する説法のテレビ放映、イスラーム法学者による、「植樹の日」をはじめとした環境啓発イベントへの積極的参加、書店における「イスラームと環境」に関する書籍の増加等は、この新たな取り組みの一側面を示しており、近年現出し始めたイスラーム的環境言説に寄与していることが明らかになった。

以上のように、現代イラン社会における環境問題の現状を打開するために、様々な個人・団体が解決に乗り出している。彼らのアプローチは多様性に富み、それらは、イランの文化的歴史脈絡を反映しながら環境言説を発達させ続けている。とりわけ、「環境」分野の改善に向けて、近代西洋科学知、ナショナリスティックな情操、またイスラームに根ざした、特徴ある環境言説が産み出されている。多くのインフォーマントはこれらの言説を通じて環境問題を認識し、活動あるいは日常生活に携わっており、それらは、互いに相反する関係であるよりも、文脈に応じながら併存し展開し続けていることが本調査を通じて明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Satoshi Abe, Management of the Environment (mohit-e zist): An Ethnography of Islam and Environmental Politics in Iran, Japanese Review of Cultural Anthropology, 査読有、vol. 17, 2016, 63-81.

Satoshi Abe, book review, “Water on Sand: Environmental Histories of the Middle East and North Africa” A. Mikhail ed., Journal of Islamic Studies, 査読有、vol. 27, 2016, 258-261.

〔学会発表〕(計 5 件)

Satoshi Abe, Compatibility of Islam and Science, 2017年5月27日、第51回日本文化人類学会研究大会、神戸大学(兵庫県神戸市)

Satoshi Abe, Transfer of Environmental Technologies across Asia: Looking through the Lens of Islam, 2016年11月6日、第14回アジア太平洋カンファレンス、立命

館アジア太平洋大学(大分県別府市)
Satoshi Abe, An Examination of Roles of Islam in Iranian Environmental Politics, 2016年5月15日、第32回日本中東学会年次大会、慶應義塾大学(東京都港区)
阿部哲、現代イランにおける環境意識と実践：イラン人環境活動家の事例から、2011年11月22日、第14回科学技術社会論学会、東北大学(宮城県仙台市)
阿部哲、イラン社会における環境ディスコースの普及と多様性：人類学的視点からの考察、2015年5月17日、第31回日本中東学会年次大会、同志社大学(京都府京都市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 哲 (ABE, Satoshi)
長崎大学・多文化社会学部・戦略職員
研究者番号：90732660